

握も十分になされず、病気の完全な除去ができないうちに生産が行われてしまいます。一般のは場にてて行きますと、その品種だけにとどまらず、それが感染源となり周辺の馬鈴しょが汚染されて、取り除くのに期間がかかっておりました。新しい品種の無病化と急速な増殖には、M.T.による増殖技術が最適であると考えられます。

したがって、種馬鈴しょを生産するところは、M.T.の作成技術から、は場で病害に感染させずに種いも生産ができるまでの技術は必ず持っている必要があります。

M.T.を種いもとして栽培した際に不安になるのは、初期生育が悪くウイルス病の感染が起きやすいことです。被覆栽培ではある程度の解決を見ておりますが、それでも完全な

解決とはなっておりません。種いも栽培で最も重視をしなければならないのは、感染を防止するための方策をつくることで、その方策の一つが病原の除去なのです。

M.T.は病原の除去には気を使うことはありませんが、最も重要な初期生育の不振が解決しないと、採種栽培のエースにはなりません。かつて、1985年頃までに3回ほどウイルス病の大発生がありましたが、そのような状態に遭遇したならM.T.は場の方が大きな被害を受けることでしょう。初期生育の不振を乗り越えてこそ、はじめて採種栽培の主役となることができます。被覆栽培にこだわらず、初期生育の促進のため、あらゆる分野での成果を応用した、今後の研究に期待をしたいものです。 (完)

種いもワルツ

かなり前のことですが、北海道江別市にお住まいの村山 亨さんから昔道央のジャガイモ採種農家の間で歌われたと言う替え歌が送られてきました。

作詞は、渋谷正五郎さんで、昭和27、8年ころの札幌近郊の農家の集まりとか、検査が一段落した後に出かける視察という慰安バス旅行の車中とかで歌われた時期もあったようです。この専門語も入った種いも検査の歌が、道内では大手の中央バスのガイドさんにまで知られて、広く紹介されたそうです。

曲は「芸者ワルツ」で歌います。

1. 貴方のリードで種いも作り
塊茎単位に植えつける
やっとすんだと見上げる空は
明日も天気か 夕日が赤い
2. やがて芽が出る すくすく伸びる

バイラス（ウイルス）残らず拔取りだ
あれが真症 これが疑似と
貴方は手を取り教えてくれる

3. 気になる検査もこと無くすんで
ホッと安堵の胸なでる
これも皆の指導のおかげ
胸に感謝がこみあげる
4. 今日は楽しい アベックバスで
二人仲良く揺れている
年はとっても新婚気どり
一人者には チト照れるのよ
(若い者にはまだ負けられぬ)

長い間種いも検査をしていた伊藤茂郎さんが1997年3月に出した「海軍と植物検疫」という本によると最後の行は（ ）内のようになっていましたが、どちらが正しいのか不明です。

(ホクレン主任技師 浅間和夫)